

優秀賞      千葉県      原田 真世 様      （40代 女性）

その日は突然来てしまった。

生後3ヶ月の息子を1人で育てなければならなくなった。どうしよう…。

大黒柱である主人が突然の事故で他界してしまった。悲しみを通り越し、恐怖でしかなかった。これから先の生活どうなってしまうんだろう。私一人で息子を育てられるだろうか？仕事探さないと…考えてもいなかった事態に不安と絶望しかない。

自身の身にずっしりと押し掛かった重い尊い息子の命。きっと主人は私に「ごめん！頼む！」と懇願しているに違いない。まるで、いきなり大荒れの大海原へ子供と二人放り出されたような現状。先の見えないこの恐ろしさは、経験した人間でないと絶対にわからないと思う。

そこへ「救い主」が現れた。主人の職場の総務の方からの1本の電話。

「奥さんとお子さんは遺族年金が受け取れます。」

義母は「遺族年金がもらえると思う。早く手続きをしてもらえるように私が会社に頼んであげるから。」と言ってくれていた。

主人は身を粉にして懸命に働き、しっかりと保険料を納めてくれていたので、妻である私と、息子は遺族年金として受け取れる権利があったのだ。

恥ずかしながら私は、今回の出来事でこの「救い主」である遺族年金の存在を初めて知ることになった。“地獄で仏にあった”とはまさにこのことだと思った。

これから先、息子が18歳になるまで、遺族年金という救い主に助けてもらいながら、私も頑張って働こう。なんとかなるかな、と希望が持てた瞬間だった。

私の中で年金とは、老後に初めて受け取れるものという浅い知識しかなかった。

今回のように、いざという時の生活を支える遺族年金としての仕組みがある。とてもありがたいものということを初めて知った。年金ってすごい！素晴らしい！

私も仕事を始め、給与から保険料を天引きしてもらっている。

人生は本当に何があるかわからない。私がもし病気やケガで働けなくなったら、「障害

年金」として助け船となってくれるだろう。自分だけでなく、他の誰かの助けになるかもしれない。そんな気持ちで、年金を身近に考えるようになった。

あの日から17年の月日が経った。年金が振り込まれるたびに、銀行のATMの前でお金が出てくるまでの数秒間、黙とうするのが私の決まりとなっている。手を合わせ、南無阿弥陀仏…と唱えながら主人の顔を思い浮かべる。隣の人がぼかんと私を見ていたこともあったが、私はそれだけ「天からの仕送り」である遺族年金に感謝してやまないのだ。

生後3か月だった息子も今は大学受験を目指す高校生に成長した。絶望の日から今まで、遺族年金のおかげで不自由な思いをさせずに済んだ。学校の体操服、教科書、食べ物、本人のやりたいことは人並みにさせてあげられたと思っている。

私はあえて息子に「お父さんが頑張ってくれた年金があるから生活できているんだよ。」と話してきた。

「父親がいないのは寂しいけど、僕は今まで困ったことがない。」こう言ってくれた。報われた気がした。遺族年金が心の支えとしてあったからこそ、私も働いて頑張ろうと思えたし、実家の両親の協力なしでは仕事に専念できなかった。

祖父母っ子である息子は、おじいちゃんおばあちゃんを大切にする気持ちを重んじる子に育ってくれた。ある日突然、大海原へ放り出された私たちに手を差し伸べ、引っ張り上げてくれた実家の両親の存在。そして年金と言う黄金の助け船。私も息子も周りの人に助けられて生活してこられたのだとしみじみ思う。

息子ももうすぐ年金を納める年齢になる。今までは受給している立場だったが、それを当たり前だと思わず、自分が年金のおかげで大きくなれたことを忘れずに、父親のように働いてしっかり年金を納めてほしい。自分のためでもあるが、家族や人をつなげて支える年金制度はとても大切な制度であることを改めて息子と話したいと思う。そして、保険料を払うことを渋る友人がいたら、ぜひ自分の経験を話してみしてほしい。自分の将来の家族を守るためでもあると。

そして最後に。主人が生前、生活費として私に手渡ししてくれた最後の1枚の旧札の一万円札がある。それは今、息子の一生のお守りとなっている。今まで助けてくれた年金制度

に恩返しをする気持ちで、これからは日本の年金を支えていってほしいと切に願う。